

り刻むと聖餅はあたり一面の血と広がり、火に擇ると炎の上をひらひらと飛び廻る。質屋の家から流れ出た血で犯罪が発覚するのだが、よく見るとこの血、扉の透き間からではなく、不思議なことにオクト・プラズマよろしく壁を擦り抜けて流出している。いわば奇跡が自然法則を侵犯することではじめて、ユダヤ人によるキリスト教の冒瀆が暴露される。さらに我々鑑賞者は、扉を外からたたき割ろうとする群衆と、家の内部の不安げなユダヤ人家族との葛藤を、科学的な透視図法のおかげで、同時に「透視」する。この絵画空間上の越境行為によって、(当時の政治状況下) もっとも忌むべきものとの烙印を押された異教徒の密かな犯罪が白日の下に晒される。

ここまでくれば、浅田彰氏の『構造と力』の読者にはからくりが見破られるだろう。絵画空間の上での一見ささいな破綻ともみえかねなかった細部に、実は宗教上の秘跡の飛躍点とイデオロギー上のタブーとを繋ぎ留める仕掛けが隠されていた、というわけだ。以上、新歴史派の雄スティーヴン・グリーンブラットの、ルンド大学における講演の粗筋から。ミシェル・ド・セルトーの薫陶の跡も歴然たる西海岸の鬼才は、大の日本通、日本最良でもあった。

壁を通る血

ステイーヴン・グリーンブラットと説話分析の裂け目

稲賀繁美

三重大学・フランス文学

そんな例には事欠かないのだが、とりあえずヨース・ファン・ヘントの祭壇画『聖体の施与』(ウルビノ、1473/4)を取り上げよう。最後の晩餐の場面でイエズスは「これは我が体なり、これを取って食せ」と言ってパンを差し出す。ところが、それを受け取るのは弟子たちではなく、この祭壇画を注文した寄進者たちなのだ。説話論的にいえば、画面には見えざる穴が穿たれていて、イエズスの生涯と画面のこちら側の現実の肖像とが直につながっていることになる。この穴を介して、いわば宗教史上の永遠の真実の瞬間が、現在という個別的な歴史的時間へと流出してくることになる。カントーロヴィチも指摘するとおり聖職ministeriumと神秘mysteriumとはながらく互換可能で混用されてきた。またマックス・ヴェーバーをもしれば、キリストの秘跡という大聖職の奇跡は、日常のミサという小聖職において日々反復されている。その両者を繋ぐ秘密の通路が、この祭壇画に走る不可視の亀裂だったのだ。

もうひとつの例。ウッチェロに『聖餅の奇跡』(ウルビノ、1465/9)という絵がある。あるユダヤ商人が高利貸しの代として最後の晩餐の聖餅をまんまと手に入れる。ところが小刀で切